
しろとくろ Story.00 Overture

麻生柚葉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

しろとくろ Story · 00 Overture

【Zコード】

N6107M

【作者名】

麻生柚葉

【あらすじ】

白い白い世界にやつてきた蒼い天使。

どうかどうか、彼の者の願いが届きますように。

一人の少女は本を開き、物語を読み始めた。

物語の名は

そう、『しろとくろ』

01 天使と鍵の少女

最後の力を振り絞り、天使は世界を渡った。

建物も、植物も、人々も・・・
あるべきモノは何一つ其処には無く、見渡す限り白一色に染まっていた。

音も無く動く物も無い世界
ただただ、白く染まつた空から真っ白な雪が降り降り続いている。

何一つ穢れの無い世界を天使は純粋にそう思った。

綺麗だ・・・

サクリ、サクリ

自身の足音しか聞こえず、自身の足跡だけが世界にとつての唯一の穢れだった

凍える様な寒さに顔を顰めながらも、目的の為に歩き続けた。

幾度となく見えた“先の未来”

生まれながらにして予兆という能力を持つていた為、見たくも無い未来がいつも見えた。

例えば、明日訪問者が来ると前々に約束していたとしよう。その訪問者が自身の所に来る前に、話す事柄・行動全てが分かるのだ。

例え自身が見た未来と違う行動をしようとも、訪問者が行う事は何ら変わり無い。

生きしていく上で実につまらない事だ。

自身の死の瞬間でさえ・・・はつきりと分かる

ずっと長い間嫌っていたこの能力。

しかし、この世界でこの能力から開放され、別れる事が出来る。

この先、朽ちるしか無いこの身

今更・・・という感じではある。

だが、それでも開放されたかった・・・

と、またそれも皮肉な事に嫌っていた力で分かつたことなのだが。

それによると、この進む先には“鍵”が・・・

いや、“彼女”が居るはずだ。
有を無に返す力を持つ少女。

真っ白な白の世界で唯一の存在

雪にも負けない透ける様な白い肌、まるで世界に溶け行ってしまい
そうな汚れ一つ無い白いワンピース
相反するかのように漆黒に染まつた髪と背中の羽根・・・
黄金に輝く目を閉じ、ただ眠るよつこ。

彼女の世界に無断で入ってきた天使に『貴方は私を
迎えに来てくれたの?』 と

はあ・・・と吐いた息が白かつた。

寒さで凍えてしまいそうだ。

冷え切つた手に息を吹きかけてみたが、それすらも熱を持つていな
いように感じる。

雪の所為だけでは無いだろう。この世界は異様な寒さだ。

“見た”だけでは映像しか伝わらないので、この予想以上の寒さに
苦笑するしかない。

もうすでに手も足も感覚がなくなつてきている。

目の前が霞み、意識が朦朧としてくる。

一度でも倒れたら、そのまま動けなくなりそうだ。

もう、このままこの世界で眠つてしまいたいと弱い自分が囁く。
何も考えず、見てしまつた先のこと等忘れて・・・

それでも、足を動かし歩き続けられるのは自身の為と zwarだけない。

もう一つ、少女にどうしても叶えて欲しい願いがあった。
愛しい人に少しでも幸せになつて欲しいという思いで。

* + * + * + * +

もう、どの位歩き続けたのだろう。もう、どの位の時間がたつたのだろう。

何も無い世界に感覚を奪われ見当も付かない。

目印などは何も無く、唯一つある自分の足跡も時が立てば白の世界に埋もれていく

こんな世界に本当に目的の少女はいるのか・・・？

ただ、一人でこの寒さの中生きているのか・・・？

“見た未来”は一度と外れたことは無かつたが、とりとめもない考えが浮かび多少不安になる

だけれど、立ち止まる訳にはいがず、ひたすらに長い間歩き続けた。

そんな中ふと視線の先、何も無い白い世界に黒いものが映った。

「居たつ！ちゃんと居た！！」

思わず声が出る。寒さで震える声は発していたのか分からぬいくらいの小ささだった。

目を擦り、何度も確かめる。大丈夫。これは幻なんかではない！

動かない足を叱咤し、縛れながらも急いで前に進む。

早く早く辿り着きたくて、気だけが急いで何度も転んだ。

何度も何度も“見て”会いたいと願つた少女が居た。

薄いワンピース姿で雪の上に寝転ぶ少女。

寒さを一切感じていないのだろうか・・・

肌は雪に溶ける様に白い。きっと彼女の地の色なのだろう。桜色の唇を見る限り寒さで青白くなっている訳ではない。瞳を閉じ、ピクリとも動かないその姿はまるで生きていない人形のようだ。

思わず、その生氣の無い白い頬に手を伸ばした。

近づいてきた手に気がついたのか、頬に触れる前に少女は閉じていた目をゆっくりと開け、金色の目を天使に向けた

「貴方は私を迎えてくれたの?」

幾度と無く“見た”通りに彼女は言った。

「違うよ。私は君に願いを聞いてもらひ為に来たんだ。」

「そう・・・」

興味無さ気に再び目を閉じる彼女に苦笑した。

そして、“天使”と“鍵”は出会った。

02 天使の願い

「ねえ。お願いだ。私の話を聞いてくれないかい？」

目を閉じた少女に天使は話しかけた。

しかし天使が迎え人では無いと否定したからか、少女は無視を決め込むつもりなのか微動だにしない

天使がこの世界に来たという事も、少女にとつては何の関心も無いらしい。

「お願いだ。聞いておくれ。君にしか頼めないんだ。」

「私は・・・待っているの・・・私を必要としてくれる誰かを。迎えに来てくれる誰かを。」

聞き取れるか聞き取れないか細い小さな声で目を閉じたまま少女は言う。

“必要”という事に関していえば、天使も少女の力を必要としているのだが“迎え人”・・・

この世界から連れ出せる存在では無いと意味は無い。

天使は笑みを深くした。

少女は一途に王子様に恋をして待っている、おとぎ話のお姫様のようすで・・・

眠り姫。まだ見ぬ王子様に思いを馳せて、その他の人には用は無し。人形のように表情があまり変化しない少女がとても愛らしく微笑ましく思えた。

少女の顔は整つた作りをしている、着飾つて微笑めば本物のお姫様も田も及ばないくらい可憐なお姫様に変身するだろつ。

しかし、王子様では無い天使はここで諦める訳にもいかず、お姫様の為に助言をする魔法使いの立場くらいにはどうにか昇進しないといけない。

なんて寒さの所為か思い浮かんだ少し外れた考えを頭の隅に追いやり魔法の言葉を呴いた。

「・・・君の迎え人の事、多少は知つてているのだけど
言つが早いが、少女は迎え人の単語に反応し田を見開いた。

「知つているの？ 会つた事あるの？ ねえ、いつ来るの？ どんな人なの？ ねえ教えて！」

少女はガバリと、勢い良く飛び起き、今にも天使に掴み掛かりそうな勢いで問い合わせた。

迎え人の事となると少女は我を忘れるらしい。

今までの興味無さぶりは何処に行つたのか、声を弾ませ必死の形相で詰め寄つてくる。

少女の表情と「うも」を初めて見た。

「まあまあ、話すから。少し落ち着いて？」

放つておいたらそのまま天使の首を絞めてしまいそつた手をやんわりと押し返して言った。

力無い天使はこのか細い少女の手でさえ凶器に思える。

さすがに、少女に首元をつかまれ揺さぶられ力尽きたると言つ“未来”を見たときには背筋が凍つたが・・・それは悪いパターンであり、何度も何度も最良の方法をヒショミンーションしてきたからにはじで力尽きたら、たまつたものではない。

「迎え人の事を話すのは全然構わないんだ。だけど、君に僕の願いも聞いて欲しい。

交換条件と言つわけだね。お願いできる?」

「つ！」

とたん、少女は大きく目を見開くと、少女はワンピースの裾を強く握り締め俯いてしまつた。

怯え、恐怖に揺れる目。全てを拒絶し、何も映らない目。この目には覚えがある。

我が子のように可愛がってきたあの子と同じ目。目の前の少女はいつぞやのあの子と変わらない。

嫌つ！ 僕に近づか・・・ないでつ

あの頃の事がフラッシュバックする。

あの子と初めてあつた時、涙すらも流せない状況での子はずつと孤独と恐怖に耐えてきた
蔑まれ、拒絶され・・・

限界に近かつたあの子ほその恐怖で力が暴走させ、天使は大怪我を

した。

それを思ひついで今女の反応はどうしても可愛いものなのだが。

そつと近づくと、恐怖からか微かに肩を揺らす少女の頭を天使は優しく撫ぜた。

す」と、孤独と言ひ、恐怖に耐えてきた少女を怖からせないよ」と、何者からかの支配に怯えて、疲れきつた心を安心させるかのように、壊れ物を扱うかのようにそつと。

過去にやつた同じ様に。

「怖い事は何も言わないし、やらせたりしないよ。過去に、君がどう言われてきたか私は知らない。だけど、絶対無理な事は言わないよ。だからお願ひ。」

出来るだけ優しい声で、驚いて顔を上げた少女に精一杯の優しい笑顔を向けて。

過去を見ることが出来ない天使は少女がどんな過去を送ってきたかなど知ることは出来ない。

だけれど、想像することは出来る。反応から見るに彼女は理不尽に命令をされ良いように使われてきたのだろう。そして孤独に逃げ、また孤独に苦しんでいる。きつく握り締めた手をやんわりと解いてあげ、またきつく握り、手を傷付けないようにと自身の手で包み込んだ。

最早、天使の手に体温など無いも等しかつたが、それでも温もりの無い少女の手に温かさは伝わつた。

「大丈夫だから怖くないよ。簡単な事だから。

そうすれば迎え人の事、教えてあげられるから。」

天使自身、こう言つのは卑怯だとは思う。

迎え人の事を持ち出せば、少女は『YES』と言わずにはいられないだろう。

迎え人は少女を孤独から連れ出す救世主。会いたくて会いたくて仕方が無いだろう。

それをネタに釣るのは少しばかし罪悪感を覚える。

だが、少女の為にも天使の為にも・・・

これが最善の方法だと分かっているからこそ、強行するしか方法がない。

少女の震えが手に伝わる。

少女を救えるのは天使ではない。救う事が力無き天使には出来ない。今にも壊れてしまいそうな小さな少女を目の前にいるのに天使はどうする事も出来ない。

冷え切つた天使の手では体温の無い少女の手を温めてあげる事さえ、心許ない。

歯痒い思いが胸に広がり、締め付けられた。

その瞳に涙は無い、しかし逆にそれが悲しく思えた。

声も出さず、唇を噛んで縮こまつて震える少女は僅くそれでいて痛々しい。

苦しい。何も出来ない無力な自分が。

迎え人を今すぐこの場に連れて来れない事が

少女の為に道を指し示す事しか出来ない事が

少女は声を出さずに僅かに「クリと頷いた。

顔を上げた少女の横顔にあの子の面影が被つた気がした。

02 天使の願い

「めんね。でも、どうしても叶えて欲しいんだ。私の為に、あの子の為に・・・そして君の為にも

やはり、恐怖心は治まらないのか少女は小さく震え、天使の方を一切見ようとしなかった。
それでも、話を先に進めないといけないので気にせず天使は話し始めた。

「君は“予兆”・・・というものを知っているかい?」

「・・・予兆?」

一度上げた顔をまた俯かせ、じつと手を見続けてはいるが、話を聞いてくれている少女に安堵した。

「予兆というのは自分の未来の全てが分かってしまう災いの能力の事。

『ごく僅かには役に立つことはあっても、ほとんどは見たくも無い未来を見せる。

生きるにとてもつまらない能力さ。

その力を私は持っているんだ』

それが何?とでも言つように、先の見えない話に少女は無言で促す。

「君は・・・

君はこの忌まわしい力を消す事が出来る。」

「出来ない。人ではないものを操る力はあっても、私にそんな力はない。」

天使の言葉に被せる様に素早く言い放ち、まるで子供が嫌々をするように頭を振った。

「私には何も出来ない。私は・・・私には・・・」

「出来るよ。君なら。気付いていないだけさ。君自身が作ったこの世界に居るからこそ出来る。

有を無に返す力を持っているんだよ。」

仕返すかのように、今度は天使が少女の言葉に被せる様に言った。

「何故、分かるそんな事・・・私は無力で、人を脅かす事しか出来なかつた。

そんな私が貴方を助けうる力を持っているとは思えな・・・」

思えないと言いかけた所で、ふと浮かんだ答えにぶつかり少女は言葉を止めた。

「・・・“見た”のね自身の未来を。私に、その予兆を消させる所を」

「賢いね。そういう子は好きだよ」

笑顔で天使は言つたが睨まれてしまつた。

少女から不安は消えては無さそつだが、久しぶりに誰かと話すと言うことを楽しんでいるように見える。

言つた通りに少女は賢く頭の回転が速い。

それでいて、納得がいかなければ反論し、答えが的確なら納得する。土俵に上げさえすれば、天使とて言葉で負けるつもりは無い。少女に気付かれないようこつそり微笑んだ。

「ああ、“見た”君には出来たよ。それが。

そして、断言しよう。君は自分から消すと言に出すよ

「何、戯言を言い出すの。私が自らへ出来もしないと疑つて下さいるのに？」

「そうさ、それが君の待つ迎え人に繋がるからね。君はやるよ。」

「何故？何故それが迎え人に繋がると言いつの？」

「君の迎え人は・・・そう、私と同じく予兆の力を持つていてるからだ。

そして、同じように苦しんでいる。

迎え人が君の目の前に現れた時、知識の無い君は彼を救えるかい？」

「・・・言い方が卑怯」

何もかも知った上で、少女がYesとしか言えないよう追い詰める。やけに爽やかに笑う天使が癪に障つた。

コイツは、嫌いなタイプだと少女は思つた。笑顔の下にとんでもない物を隠し持つている。

少女は即座に頭を働かす。負けたくない。考えろ。上手く丸め込まれるな・・・

しかし、すぐに少女は悟る。やられた。

天使が嘘をついている可能性もある。迎え人をだしに使つている可能性もある。

だが、長年待ち続けてココに来たのは天使が初めてであり、迎え人の事を知つてていると言つた。

これは嘘では無いと思う。それに疑つて突っぱねたとして、天使の次に誰も来ないかもしない・・・

そう考えると本当にしろ嘘にしろやりすに後悔するより、やつて可能性を広げた方が格段に良い。

無理な事はやらせないと言つた。これは少女にとつても良い話になる。やつてみて損は無い。

どうせ後悔するなら、わざわざこの世界を探し出した天使の真意を見るのも悪くない。

・・・やるしか無いではないか。本当にコイツの相手はやつにいく。

額に手を当てながら頭の中でハイスピードで考えを走らせているであろう少女を見て天使は満足そうに微笑んだ。
何の知識も準備も無く少女と言葉を交していたら絶対に負けていただろう。

なんせ、天使は長い時間をかけて少女に言つ言葉を考えてきたのだ。
少女に出し抜かれたりはしない。

「それでは、卑怯ついでにもう一つ・・・

これは、私が君に叶えて貰いたい願いではないからね。別に私自身はこの力を消さなくとも問題は無いんだよ。

君に対してのサービス精神さ。稀なる練習代になつてあげようかと。

「本当に・・・嫌な人」

予想通りの天使の言葉に少女は降参だと言つよつに溜息を付いた。

少女がどちらの選択をしたにしろ、困るのは少女で、天使にとつてはどちらにしても構わないということ。
だけれど、天使が予兆の力を嫌つてているのは明らかだ。問題は無い

と言いいつつも、自分に良い方に話を進めている。
それが分かつていながら言い返す言葉が見つからない。

人畜無害そうな顔をして、なかなか弁が立つ。
少女の性格を知つての上での話術、言い回し・・・
すっかり、少女は天使のペースに巻き込まれていた。

「さて、それを踏まえた上で・・・やるかい？」

「やるわ」

天使の目を真つ直ぐ見つめた少女は決意を固めた目をしており、今までの怯えは何処にも無かつた。

本当は、少しでも君の記憶に残りたかったんだと言つたら君は怒るかな？

03 予兆の力

深々と降り積もる雪

それはとめどなく、降りそそいで終わりなど無かつた。

「それでは、早速始めようか。」

「・・・良いわ」

片方は飄々とした笑顔で、片方は少し緊張に包まれながら言った。

「私の手を握つて、強く願つておくれ。

“予兆の力”が消えるようこそ・・・と

「・・・はい?」

想像していたよりも安易な事に思わず少女は眉をひそめた。

「たつた、それだけ?」

「そう。それだけ。」

あっけらかんと、とも当然と言つて言つてきる天使に若干殺意が沸いた。

練習の必要などないではないか。

何も考えずに見れば爽やかな笑顔なのだろうが、してやつたりと言う笑顔に見えてしうがない。

少女は腹癒せに拳を握ると相手に怒りが伝わるよう腹に渾身の一撃を食らわせた。

「うぐつ〜〜

（ふんだ！人の悪い奴）

お返しとばかりに少女はしてやつたりと言ひ笑顔を作つてやつた

「長い詠唱を唱えないとか、生贊が必要とか、私の血を使うとかそういうのも？」

「・・・何を想像してるか解らないけど、一切無いよ。
だけど、強く願わなくてはいけないんだ。」

天使は少女の手を取ると自身の手と絡め、お話を語るように呟いた。
「君は生まれが特殊だ。世界に一人と居ない唯一の稀有な存在。
しかし悲しい事だけど、世界では忌むべき存在。君は人間の愚かな願いから作られた」

そう、彼女は世界には不要ないらしい存在。

「人間が犯した禁忌だ。

人が持つてはいけない、望んではいけない力を君は持つている。

利用され・・・悪用された。そして恐れられ忌み嫌われた」

「そう・・・私はそういう存在」

理解はしている。受け入れてもいる。

だから何と言われようと今更何の感情も湧き上がらない。
だって、少女は存在してはいけない存在だった。

（・・・そんな事、生きると決めた時から分つていてる。）

だが、無意識に握った手に力が入る。

「君はそういう存在かもしれない。でも・・・

私は、君が存在してくれたことを本当に感謝するよ。

・・・まあ、私も君の力を必要として来た訳だから人の事いえな
いんだけどね」

わざわざ余計なことまで言つて天使は苦笑した。

少女は何故だか過去会つた力を利用してしようと接してきた人とは違う
ような気がした。

「ねえ、貴方は何を望むの？貴方の望みを聞かせて」
「ただ、愛する子の幸せを望んでいるんだよ。
ずつとずつと、私は一人だった。辛くて寂しくて悲しくて・・・
だけどあの子は唯一傍に居てくれた大切な子なんだ。
私ではもう、悲しみを作るだけで幸せにしてあげられないから。」

「そう・・・」

「これが私の本当の願いだよ」

少女は過去の思い出を懐かしむように目を閉じた
「・・・分るわ。私も幸せを望むしか出来なかつた。私では幸せに
なんか出来なかつた。

案外私たち似た者同士なのかもしれないわね」

「ははっ、そうかもしれないね。」

二人顔を見合すと笑つた。

* + * + * + * + *

少女は金の瞳を閉じる。やう、それはまるで祈るよつに。想いを誓うように

ふわり、と何処からともなく風が優しく吹き、天使と少女の周りが淡く光り輝いた。

小さな光の粒が舞い、天使の中に入つて行つては、また違う輝きを灯し出でくる。

そして降つてゐる雪に混じり、はらはらと落ちて地に還つた。それはどこか神秘的であり、幻想的であつた。

綺麗だ・・・

少女がであり、少女の心根が体現した様でもある。

手を繋いでいるし、引き寄せれば抱きしめる事のできる位置にいる。だけど、天使には決して手の届かない存在。

ほんの一瞬の出来事だつたのかもしれない。だけど天使には時が止まつたように感じられた。

静かに全ての光が地に還つていいくと淡い光は消えていった。

「本当にこれで成功なの？」

「ああ。大丈夫だと思うよ。」

それでも訝しげに少女は天使を見る。

たしかにこんな光はこの世界に来て初めて見るものだつたけれど、たつたこれだけの事で良いのだろうか。

「まあ、私は貴方が良いなら良いんだけれど。私には確かめようが無いし・・・

「それより・・・なんか色々見たことの無い映像が見えたのだけど」難しい顔をし、眉を潜め考え込むように言いつ。

「それは、私の心に・・・思いに少し触れたんだろうね。君に願いを叶えて貰おつと強く願つてている訳だから伝わつたのかもしれない。ちなみに何が見えたんだい?」

「壊れそうなウサギ」

これしか例えようが無いところよつとぱり真顔で即答する。

「・・・あながち間違つては居ないね」

ウサギに例えられた我が子を思つて苦笑した。

孤独も、辛さも君と私と一緒にするのは気が引けるけれど。君との
繫がりが嬉しかったよ

「それで？迎え人の事教えてくれるのでしょうか？」

少女は待つてましたとでも言つて、眼を輝かせて天使に詰め寄る。

「はいはい。逃げやしないから落ち着いて落ち着いて。」

またも同じ事をしだしそうな少女の肩をやんわり押しのけ、彼女を座らせた。

良く見ると律儀に正座などしている。

「この本見ておくれ。」

そう言って天使は羽織の中から一冊の本を取り出すと少女に手渡した。

白色と黒色でシンプルに彩られた少し重量のある分厚い本特にどこかに特徴がある訳でもなく、飾り氣の無いひどく質素である。

中央に白い羽と黒い羽のデザインのマークが描かれており、真ん中で輪になるように鎖で繋がっていた。

物語の名は

そう、『じうとく』

「？」

少女は訳も分からず首を傾げます。

一体何の変哲も無いこの本の何処に迎え人との関係があるのでしょ
う。

「有を無に返す力を持っていると私は君に言った。

君の力はそれだけではない。無を有にすることが出来る。
この雪が降り続く何も無い世界は君自身が作ったものだ、だから
こそこの世界では君は唯一の存在で創造する力を持っている。

私はその力を借りたいのだよ。」「

「説明を端折りすぎよ。理解ができないわ。」

端的な説明に少女は呆れたように言います。

他人の事には雄弁なのに自分の事が絡むと語彙が少なくなるらしい。
癖なのか、一つ一つが意味深で遠まわしだ。

「うううの苦手なんだよね。と咳きながら天使は困った様に頬をか
きながら微笑むとポツリポツリと説明しだす。

「ううん。何て言つたら良いのかな。

その本には少しの過去と未来の話が書いてある。

君が読むことによつて、君が那样的に願つて読むことで無が
有に変わる・・・

この物語は空想物語から、実際に起つる物語に変わることが出来
るんだ。」「

「それで？」

「この本は私が愛する子の・・・愛する子達の幸せを願つて書いた

ものだ。

沢山悩んで考えて一番最善だと思つ物語を書いた。
この本が実現すれば、あの子達はきっと幸せになれる。
だから、君にこの本が実現する事を願つて読んで欲しい。 そうすれば私の願いは叶うんだ。」

「ねえ、貴方の願いは分つたけど肝心の迎え人はどうなるのよ。
貴方がウサギの事思つてるのは凄く良く分るけど、私の聞いに全く
く答えてないじゃない。 脱線しちゃよ。」

「くつ？」

天使は一瞬キヨトンと目を丸くし、パチパチと大きな目を瞬くとす
まなそうに苦笑いをした。
どうやら、焦りで先走つているようです。

これだから良く抜けてるとか、親馬鹿とか言われるんだよね。
乾いた笑いをしながら天使はそう呟く。
少女が無言で呆れた視線を寄越してくるのが突き刺さつて痛いが、
長年言われ続けて直らないので今更どうしようもない。

案外攻撃的な彼女の拳が飛んでくる前に急いで話題を戻すことにつ
た。

「うんうん。 そうだよね。 迎え人だ。

この本を読んで、この本を無から有に変える事が出来たら君の迎
え人は来るよ。

ちゃんと迎えに来るよつこ、この本に書いておいたから。」

「じゃあー」この本を願いながら読み終われば貴方と私の願いが両方叶うのね！」

嬉々とした風に少女は本を抱きしめながら叫ぶ。

凄い凄い！と自分の事でも喜んでいるのだろうが、今までそこまで良い印象では無かつた天使の為にも喜べる彼女に天使は心洗われる気がした。

先ほどまでの呆れを含んだ雰囲気が一変してガラリと変わった。

彼女は少し疑い深くて猜疑心に溢れているが、一度でも彼女に認められればとても素直で。

こんな短期間で彼女が心を許してくれた事を思つと天使は気持ちの高鳴りを抑えることが出来ない。

表情がややかけてはいるが、こうして嬉しそうな感情を体全体から出している少女を見ると心が温かくなる気がして、動悸が速くなつた。

「のまま、時が止まつてしまえば良いのに・・・

柄にも無く、天使はそう思つた

「・・・私は」

声にならない咳きは降り注ぐ雪のよじて静かに地に落ちて白に混じつていつた。

私では迎えに来ることが出来ないから・・・だからこの本に託すよ。

嬉しそうに本を凝視する少女にばれない様に酷く切なく、泣きそつ
な顔で天使は笑つた。

05 想いを本に
我が子を思つ気持ちとは別な感情で君を愛してしまつたのは・・・
私の罪

そして、訪れる別れの時。

「さて、私はそろそろ自分の世界に戻るとしよう。」

「もう?もう行ってしまうの?」

久々に出会えた人に、そして始めての来客との別れに若干少女は顔に影を落とす。

「そうだね。帰ると約束したからね。
ごめんね。・・・どうか元氣で。」

寂しそうにする少女が見ていられなくなり、天使は少女から顔を背けた。

後ろ髪を引かれながらも天使は今まで羽織で隠れていた羽を広げると力を振り絞った。

しかし淡い光が天使を包もうとした瞬間、天使は力なく膝をつき苦しそうに胸を押さえて激しく咳き込んだ。

その口からはこの白い世界にも、蒼い色の天使にも似合わない

寒さでだけではなく、不健康に青く色づく肌から赤い色が零れて雪の上に染みを作った。

「少し無理をしたようだ。

・・・もう、私は長くないから。」

そう言って弱弱しく天使は笑う。

その間も、咳き込み白い白い雪を穢していく。

穢れ無き雪を染める自身が酷く醜い存在に思えて自嘲する。

ああ、なんで・・・

何でこの“未来”が来てしまったのか。

確かに、こういう“未来”も見た。

しかし、一度で帰れる“未来”もあった。

この“未来”は彼女を苦しめるだけなのに。

少しでも彼女に自分を覚えて欲しいと望んでしまったから。
少しでも長く彼女の傍に居たいと心の奥で願ってしまったから。

想像以上に予想以上に、天使は少女に惹かれていたのかもしだせ
ん。

身勝手な自身の思いに呆れてものが言えない

覚悟などとつくる昔にして来たと言つのに、彼女を見ると搖らぐだ
なんて。

「そんな・・・笑うこと無いじゃない！辛いなら、辛いなら・・・
そんな顔しないでよ・・・見てるこっちが痛々しいわ。」

段々尻窄まりになりながら震えた声が出た。

苦しいのに辛いのになるでそれを感じさせない様にヘラヘラ笑つて、
自分の事を顧みない

そんな天使の態度に少女は苛立ちが募る。

「ここに居れば良いじゃない。そうすれば、そうすれば・・・」

「ごめんね。約束したんだ。それに最後まであの子の傍に居るって
決めたんだ。」

「じゃあ、じゃあ！ここで病気を治していくば良いじゃない！
白いワンピースを赤く染める事も厭わずに、少女は天使に駆け寄る。
その瞳には涙は無いが、泣いている様にも感じた。

「それは駄目だよ。命と言つ物はそう簡単には動かせない物だよ。
君にはそんな重い物荷をわせる事なんて出来ないから。

それに、君にはこの本を読んで欲しい。

余計な力は使わずに、この本を実現させる為にその力を使つて欲
しい。」

「だけど・・・・・」

「それが私の一番の願いであり、私の幸せだ。」

「ごめんね我慢だと思う。・・・でも、分つて欲しいんだ。」

無理を言つて居るのは分つて居る。自分勝手だとも分つて居る。

だけど・・・だけど、こつするしか天使には出来なかつた。
俯く少女に天使がしてやれる事は何も無い。

天使にとつてその現実が何より歯痒く、そして苦しかつた。

渋々と言つよつにゆつくりと天使の羽織から手を離す少女に何とも言えない寂しさを感じた。

「そういえば・・・」

「？」

ふと、天使は名乗つていない事に気が付いた。
大分今更な感じは否めないが、折角会えたのだし互いの名前も知らないのも寂しいだろう。

「私は、葵と言つんだ。君は？」

少女の名前を知りつつも、葵は少女の口から聞いたかつたのであって聞いた。

「・・・六花・・・と人は呼ぶ」

六花と名乗つた少女は少し俯きながら聞き取れるか聞き取れないかの小さな声で呴いた。

「雪の花・・・か。素敵な名前だ・・・

それじゃあ、六花・・・ごめんね。 ありがとう」

そう言つと、一度だけ、一瞬だけ軽く六花を抱きしめた無意識にそして望んで、最後に一度だけ抱きしめた。

“ もうなら ” だなんて本人を田の前に言えやしなかった。

六花が何か言つ前にすぐ「葵は背を向け、

そして葵は羽を広げると淡い光に包まれていき、今度こそ自分の世界へ帰つていった。

06 染まるイロ

やよひなら、やよひなら。もひ、念ひ」との出来ない人

建物も、植物も、人々も・・・

あるべきモノは何一つ其処には無く、見渡す限り白一色に染まつて
いる。

音も無く動く物も無い世界。

ただただ、白く染まつた空から真っ白な雪が降り降り続いている。

何事も無かつたように機能し続ける六花の世界
同じように続していく独りぼっちの世界・・・

だけど、そこに異質に染まる赤い色

そして傍らに落ちた白色と黒色の一冊の本

それは、あの人気がココに居たという確かな証。
まるで夢のようだった。

ほんの僅かな時間の一人しか知らない物語

六花は本を拾い、切なそうに愛しそうに抱きしめた。
そして本を開き、物語を読み始めました。

自分を必要としてくれる“迎え人を想つて
居なくなってしまったあの人の幸せを願つて

静かに雪が降り注ぐ世界にゅひくじとページを捲る音だけが響いた。

07 Codetta

それは、天使と少女にとつての確かにCodetta

だけれどそれは、幸せに向けてのOverture

しろとくる story .00 Overture
end

07 Codetta (後書き)

Story.01に続きます。

Story.01 白のプレリュード もしくは Story.0

1 黒のプレリュード

時間軸的には同一で天界側(白)と魔界側(黒)の二つ。
どちらから読んでも大丈夫です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6107m/>

しろとくろ Story.00 Overture

2010年10月10日01時19分発行